

発達障がい児の特性を活かした芸術活動の療育的効果の実証と実証方法の確立

田中 早苗

金沢大学子どものこころの発達研究センター

専門分野・キーワード：自閉症スペクトラム、アート、効果

自己紹介：臨床現場で言語聴覚士として発達障がいのある

子どもや大人の社会性やコミュニケーションの支援に携わって

います。自己肯定感や自己理解を高める支援法及びその評価法

に関する研究、アート活動がもたらす効果実証に興味のある方と連携希望します。



【背景と目的】発達障がい児は失敗体験や周囲の無理解から自己肯定感の低下や劣等感を強めるなどし、自尊心の低さや不登校等のリスクが指摘されている。ストレスの軽減や自己肯定感の向上などを狙う療育としてアートセラピーが挙げられ、不安を解消し、より良い自己イメージ及びコミュニケーション能力や学習スキルを向上させる可能性が指摘されている (Schweizer, 2014)。実際に国内外に療育としてアート活動を行う団体は多いが、どのようなアート活動をどのような場で実施すると効果があるかは明確にされておらず、効果検証法も定まっていない。本研究では、優れた芸術作品を世に出す人も少なくない自閉症スペクトラムの特性のある人 (ASD) を対象とし、特性に応じたアートワークショップの試みと、これによる効果を心理学的指標を用いて検証すると同時に、神経ペプチドの唾液濃度変化を測定し効果指標としての確立を目指す。本発表ではこれまでの結果について報告する。

【方法】電子機器 (iPad/パソコン) を用いた AW (ストップアニメーション、オリジナルゲーム作成) や、音楽も含めたイベント型など、幅広い形式・内容のアートワークショップの参加者に、事前事後アンケートやインタビュー、唾液サンプルの採取を依頼した。対象は高機能 ASD 児及び定型発達 (TD) 児とし、1 回のアートワークショップの参加者は、その形式によって、10 名～25 名。

【結果と考察】iPad を用いた活動は全員が興味を示し参加した。計 5 回のワークショップに参加した年齢が高い ASD 児の QOL の向上や社会性の向上が認められ、また音楽鑑賞等異なる形の芸術活動も盛り込んだ活動においても、多くの参加者の唾液コルチゾール濃度がワークショップ後に低下し、活動自体に対する負の感情がなかったことが伺えた。ビデオ記録や活動記録から得られたエピソードからも、療育の機会が得られにくい高機能 ASD 児にとって有効な療育形態と考えられた。また、唾液オキシトシン濃度が上がる子どもが半数認められるなど、現時点では有意差には至らないものの、アート活動による効果と関連があると考えられる結果が得られた。不安軽減や自己理解の向上など高機能 ASD 児に特有のアート活動効果を測定できる可能性があり、指標として確立するため、さらなるデータを収集する。